

令和七年度 学校推薦型選抜・社会人特別選抜試験

国語 (解答はすべて解答用紙に記入すること)

埼玉医科大学附属総合医療センター看護専門学校

受験番号
氏名

無断転載・複製を禁ず

国語 (解答はすべて解答用紙に記入すること)

埼玉医科大学附属総合医療センター看護専門学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①文系の学者は、過去の著作を引っ張り出し、新たな視点から解釈して読みなおすといったことばかりやっている。理系ではそんなことはしません。重力を学ぶためにニュートンを読みなおす、なんてことはないわけです。なんで文系はそんなことをやっているのでしょうか。それは文系の学問が基本的に(1)「じつは……だった」の学問だからです。

②(A)、文系の学問の対象は、存在するよういて存在しないものです。たとえば善とか美とか真とか言っても、そういう物体がどこかに存在しているわけではない。言葉のなかにしか存在しません。だから文系の学問は、理系のように「言葉と対象が一致すれば真実」「予測がうまくいけば真実」といった基準で学問を進めることができません。

③ではどうするかといえば、そこで基準になるのが「じつは……だった」の論理なのです。プラトンは真理という概念についてこう語った。カントはこう語った。ハイデガーはこう語った。まずはそういう歴史がある。そのいずれが正しいかについては、そもそも真実という(A)カネン自体が言葉のなかにしかない以上、理系的な手法で探求しても意味がありません。できるのは、そういう過去の歴史を踏まえたうえで、いまの社会状況に照らし、真理という概念をあらためて使うとすればこういう再解釈が有効なのではないか、という訂正の提案でしかない。そうやって未来に進みます。

④(B)、文系の知とは、本質的に訂正の知なのです。だからぼくたちは、21世紀になっても「プラトンはじつは……と言っていた」「マルクスはじつは……と言っていた」といった表現をするのですね。最近では文系学部不要論が盛んですが、このように考えると、(2)文系的な知―より正確に言えば人文学的な知―にも存在意義が見えてくるはずですよ。

⑤最近、chatGTPのような生成AIが話題になっています。なにか質問を入力すると、まるで人間のように自然な言語でそれっぽい答えを返してくれる。いろいろな議論がありますが、このような技術の出現が意味しているのは、要は人間の言語は(X)がなくとも構成できるということです。

⑥ぼくたちは日常では自動機械のように言葉を発している。この言葉のつぎにはあの言葉を発しておけばいいだろう、という連想の(b)レンサで会話を展開している。たいていはそれで問題が起きない。つまり、ぼくたちのコミュニケーションはそもそもchatGTPとあまり変わらない。だからAIで置き換えることができてしまう。

⑦(C)、人間が人間であるゆえんはどこにあるかというと、それはそんな無意識のレンサに対する「メタ意識」にあります。つまり、「あれ、違ったかな」という訂正こそが人間の人間性を支えている。人間は、訂正する力をもっているのです、(3)いままで長いあいだ使われていた言葉を、その記憶を継承したまま違う意味の言葉に変えることができる。それは、言葉の外がないと不可能な行為です。chatGTPは言葉の世界しかないのです、訂正ができません。人間は、言葉のなかだけではなく、言葉の外にも世界をもつ生物です。それゆえ、ふたつの世界の関係を調整するため、たえず言葉を訂正することを求められる。

⑧理系の知は、「言葉の外の世界」を予測するために発達したもので、「言葉の世界」と「言葉の外の世界」が個別の命題単位で一致することを求める。他方で文系の知は、(1)的には「言葉の世界」にしか関わらず、理系のような命題単位での外部との一致を必要としない。けれども、全体として(4)言葉の外の世界とずれてくると言葉の使用そのものが意味をなくし、単なる言葉遊びになってしまうので、中心をなす重要な概念についてはときおり訂正を必要とする。そんなふうに考えればよいと思います。

⑨もう少し学問的に表現するならば、自然科学と人文学の違いは反証可能性と訂正可能性の違いだと言うことができます。反証可能性というのは、カールポパーという哲学者によって100年ほどまえに(C)テイショウされた概念です。これはとてもおもしろい理論で、ひとことと言うと、自然科学においては絶対に正しい理論などありえないという考えかたです。

10 自然科学の理論は（②）的な予測を伴います。素朴な例で言えば、ある重さのある速度である角度で投げると何メートル飛ぶとか、そういうものです。予測があたれば、理論は正しいということになります。（D）、一回のテストがうまくいっても、条件を変えた別のテストがうまくいくとはかぎりません。いつかまちがいが証明されるかもしれない。だから、自然科学の理論はつねに「反証される可能性」に晒（さら）されていて、どんな理論でも（d）ゲンミツには「反証がなされるまでは」（③）的に正しい」と言うことしかできない。これが反証可能性の考えかたです。

11 ちなみにポパーは、ある命題が（④）的なものかどうかは、むしろそのような「反証される可能性」の有無で決まると考えていました。この世界には、個別のテストが不可能で、したがって反証も不可能な命題がありますが、それらは科学の範囲に入らない。（E）「神はいる」といった命題は、正しいかもしれないし誤っているかもしれないけれど、そもそもテストができず、したがって反証もできないので、（e）真偽以前に（④）的な主張だと考えることができない。ポパーはそのような基準で、科学と非科学を分けたわけです。

12 この反証可能性の考えかたは、訂正可能性と似たところがありつつ、大事なところで大きく違います。自然科学の世界では、いちど反証された理論は打ち捨てられてしまいます。だから学生が学ぶときには最新の教科書だけが必要で、過去の著作は不要なわけです。「いろいろな学者が試行（Y）をしてきたけど、いまのところもつともうまく自然を説明できる理論はこれです。これを勉強してください」となる。

13 ところが人文学ではそうはいきません。学生もまずは過去を学ぶところから入らなければならない。それは人文学が訂正の学問だからです。哲学にも打ち捨てられ忘れられた理論がたくさんあります。（5）でもそれを完全に忘れるわけにはいかない。いつ「じつは……だった」の論理で復活するかわからないからです。ここが、理系と文系ではまったく違うところです。

（東浩紀）『訂正する力』より一部改変）

問一 傍線部（a）～（e）の漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字にせよ。

ア つまり イ では ウ たとえば エ そもそも オ だから

問二 空欄A～Eに入る適当と思われるものはそれぞれどれか、次の中から選んで記号で答えよ。ただしそれぞれ一回のみ使用せよ。

ア 暫定 イ 具体 ウ 基本 エ 客観 オ 科学

問三 空欄①～④に入る適当と思われるものはそれぞれどれか、次の中から選んで記号で答えよ。ただしそれぞれ一回のみ使用せよ。

問四 空欄Xに入る二字の適語を記せ。

問五 空欄Yに漢字二字を補い、四字熟語にせよ。

問六 傍線部（1）『「じつは……だった」の学問』とあるが、どういう「学問」だと筆者は言っているのか。本文中の四字で示せ。

問七 傍線部(2) 「文系的な知―より正確に言えば人文学的な知―にも存在意義が見えてくる」とあるが、何故か。7段落よりその理由と考えられる部分を二十字以内で書き抜き、その最初の四字で示せ。

問八 傍線部(3) 「いままで長いあいだ使われていた言葉を、その記憶を継承したまま違う意味の言葉に変えること」とあるが、それは、「言葉」をどうすることか。本文中の三字の表現を書き抜け。

問九 傍線部(4) 「言葉の外の世界」とあるが、その具体的なものをこの段落以前の本文中から四字で書き抜け。

問十 傍線部(5) 「でもそれを完全に忘れるわけにはいかない」とあるが、そうした姿勢と反対の姿勢を表している一文を、その最初の七字で示せ。

問十一 本文を三段に分けると、三段目はどこからか。段落番号で答えよ。

問十二 本文の内容と最も合致するものはどれか、次の中から選んで記号で答えよ。

ア 文系の学者が、過去の著作を新たな視点から読みなおすのは、実在する真実を求めているからだ。

イ 最近、文系学部不要論が盛んなのは、人文学が、AIで置き換えることができってしまうからだ。

ウ 人文学で訂正が必要となるのは、人間が言葉のなかと言葉の外に世界をもつ生物であるからだ。

エ 自然科学に、訂正可能性があるのは、自然科学では、絶対に正しい理論などありえないからだ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 古都の秋をめようと京都へ足を延ばした。向かったのは、紅葉で有名な洛北の圓光寺。参観者は、枯山水の庭から門をぬけて書院の中へ導かれる。薄暗い室内でひざを折ると、光あふれる「十牛之庭」が(a)エマキのように広がった。

2 (1) 鮮やかな緑。染まり始めた黄や紅。この時期に初めて訪れた身としては、感に(A)ない美しさであった。そして色彩の競演を背景に、眺め入る姿が黒々と浮かぶ。(b)インエイの美でもあった。

3 地元の方によれば、暑さが続いたためか、一带は例年とは少し様子が違うそうだ。「いつもならこの木はもう盛りのはずですが、今年は遅いようだ」。染まりきる前に落ちてしまう葉もある、と残念がっていた。(2)ただ、苔に散り敷く紅葉にも自然の美しさは宿る。

4 加えて、(B)にはこんな話もある。風に飛ばされた紅葉を宮中の役人がかき集めて、酒を温める火にくべてしまった。

(3) 風情のわからぬやつめ、と叱られるかと思いきや、高倉天皇は「林間に酒をあたためて紅葉を焼き」という(C)の詩を引き、詩情のある者よ、と(c)カンシンしたという。

5 枝で(d)麗しく、落ちて惜しまれ、たかれて詩になる。紅葉の魅力は一樣でない。古来、人を引き付けてやまないのは、それゆえだろう。

6 関東から西では、これから見頃となるとが多いそうだ。(昨日より今日はまされるもみぢ葉の明日の色をば見でや止みなん)恵慶法師。色が深まっていくことを知りながら、見届けずに帰らねばならない。(4)思いを同じくして(e)キロについた。

(『天声人語』より)

無断転載・複製を禁ず

問一 傍線部（a）～（e）の漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字にせよ。

問二 空欄Aに入る適語を次の中から選んで記号で答えよ。

ア 告げ イ 届か ウ 過ぎ エ 及ば オ 堪え

問三 空欄Bには、軍記物語の代表作品が入る、次の中から選んで記号で答えよ。

ア 伊勢物語 イ 源氏物語 ウ 大和物語 エ 平家物語 オ 雨月物語

問四 空欄Cに入る唐の時代の詩人を、次の中から選んで記号で答えよ。

ア 孟子 イ 司馬遷 ウ 顔真卿 エ 朱子 オ 白居易

問五 傍線部（1）「鮮やかな緑。染まり始めた黄や紅」とあるが、その比喻表現を本文より書き抜け。

問六 傍線部（2）「ただ、苔に散り敷く紅葉にも自然の美しさは宿る。」とあるが、それは、何の具体例か。それを表している4段落以降の一文を最初の五字で示せ。

問七 傍線部（3）「風情のわからぬやつめ」とあるが、その理由を説明した次の文の空欄に本文より十字以内で補え。

「紅葉は、（ ）と考えられていたからである。」

問八 傍線部（4）の「思い」は次のうちのどれか。最もふさわしいものを選び、記号で答えよ。

ア 心躍り イ 心尽くし ウ 心劣り エ 心残り オ 心騒ぎ

問九 この文章を起承転結の四つの段落に分ける場合、「転」はどこからが最もふさわしいか。段落番号で答えよ。

三 次の①から⑤の四字熟語のカタカナをそれぞれ漢字にせよ。またそれぞれの意味を選択肢から選び、記号で答えなさい。

① クウゼン絶後 ② カンワ休題 ③ 呉越ドウシュウ ④ 大器バンセイ ⑤ ゴンゴ道断

〈選択肢〉

ア ひどすぎて許せないこと イ これまでもなかったし、今後も絶対にならないこと
ウ 仲の悪い同士が一緒にいること エ 一流の才能は現れるのが遅いこと
オ 無駄な話はやめて、本題に入ること

無断転載・複製を禁ず